

19世紀のロシアをどうみるか

岩 間 徹

19世紀のロシアをどうみるか？ 歴史文献においてしばしば次のような見解が表明された。それはつまり19世紀は西欧にとって間断なきまた急速な進歩の時代であったのに、その同じ19世紀にロシアはその世紀全体をつうじて不動と停滞の状態のままであったという見解である。この見解は根拠のないまた皮相な見解といわざるをえないし、これは一種の錯覚といっていいと思う。このようにロシアが不動であった、停滞していたという幻想がどういうところから生じたかといえ、それは主として次のような事情から生じたと考えられる。すなわちロシアは20世紀の初期まで専制政治つまり絶対君主制を維持してきたこと、この絶対君主制は西欧ではすでに20世紀初頭までに過去の遺物となってしまったということである。このことをとりあげて、19世紀の西欧は進歩、19世紀のロシアは停滞というふうに割り切った対比をおこなったのであろう。しかしこのような対比の仕方は前述のようにまことに根拠のない、皮相なものだと云わざるをえない。なるほどロシアは19世紀をとおしてこの時代遅れの、また一見何の変化もない専制政治という政治形式が維持されてきたが、しかしこの時代遅れのまた一見何の変化もない政治形式の外皮の下にロシアではきわめて本質的なまた重要な内部的变化が生じたのであって、この内部的变化は除々にロシアの経済構造および社会構造を変え、その文化生活を変えたのであり、また政治生活をすら変えたのである。言葉を換えていえば体制そのものは変化しなかったが、体制内変革が進行していたのである。体制そのものが変化しなかったことだけに着目して、体制内変革の進行に着目しなかったために、上述のような近視眼的見解が生じたのだといえよう。

この時代のロシアの歴史は決して停滞していたのではない。停滞どころか動きすぎるくらい動いていた。19世紀のロシアには **dynamism** があった。この時代は古い秩序と新しい原理との闘争の時代であった。古い秩序とは19世紀ロシアがその先行の歴史から遺産として継承したものである。すくなくとも19世紀前半において先行歴史の遺産は集約して表現するならば、専制政治と農奴制度であろう。19世紀後半においても専制政治は存続したし、また農奴制度はなるほど1861年の農奴解放によって形式上廃止されたとはいえ、実質上農奴制遺制はなお存続したのである。しからば新しい原理とは何か。これは一言にしていえば、伝統社会を近代化する諸原理であって、それは一面において国民の諸要求から自然発生したものであり、他面において西欧の影響によってロシア生活に導入されたものである。ところで、古い秩序に対する新しい原理の闘争において大き

く作用した第一の要素は、ロシアの経済発展であった。この経済発展によって、これまでの社会構成、つまり、貴族＝地主という特権階級が支配的地位を占め、農民の多数がかれらの農奴であったという社会構成の基礎が序々に堀りくずされたのである。農奴解放（1861）後のロシアの経済発展もまた同様な方向に作用した。農奴制度が廃止されてはじめてロシアはおくれた農業国から近代資本主義工業をもつ国へと漸次転換することが可能となった。そしてそのことがこんどは必然的にロシアの社会構成の上に大きな影響を及ぼすことになった。(1) まず、地主貴族の優位の漸次的没落である。地主貴族は改革前にもっていたような経済的、また文化的な支配者としての地位を確実に失いつつあった。(2) 同時に中間階級の数が増え、その重要性が高まってきた。この時期のロシアにいわゆる自由職業が出現したのはとくに重要であった。アレクサンドル二世の諸改革ならびにロシアの経済発展は多数の医者、大学教授、その他の教師、統計家、企業などの経済担当者、技師などの需要を生み出した。(3) 経済発展はまた都市労働者階級の急速な発達をもたらした。農奴解放前、都市労働者階級はロシア帝国の広大な領土にわずかに50万強にすぎなかったのに、20世紀の初めにはすでに約300万の工業労働者がいたのである。

古い秩序に対する新しい原理の闘争において大きく作用した第二の要素は、教育ある社会に西欧から入ってきた政治的自由、市民的権利、社会的平等の思想が成長強化したことである。農奴解放以前の19世紀前半の時代は華々しい文化的創造の時代であったがそれにもましてロシアの政治思想が覚醒した時代でもあった。デカブリスト反乱（1825）はその象徴的事件であった。デカブリスト反乱以後、ニコライ一世の治世の30年をつうじて、ロシアには政治運動はひとつもおこらなかったが、しかし政治思想は停滞しなかった。主としてモスクワにおいて、大学の周辺にあつまった青年のクルジョックのなかにその後のロシアの重要な諸思想の多くが生まれた。このクルジョックから西欧主義者とスラヴ主義者が出てきた。西欧主義者は、ロシアはその進歩において西欧が迎ったと同じ発達路線をたどらねばならぬと考えたのである。スラヴ主義者は西欧主義者と対立するもので、かれらはロシアの発展のためにロシア独自の道を主張したのである。さらに、このクルジョックから、穏健自由主義者および革命的社会主義者が出てきたのである。19世紀の最も反動的な治世に政治思想が異常なほど集中的な表現をみたということは面白い。注目すべき同時代人の一人、アレクサンドル・ゲルツェンがこの時代を「外面的奴隷制と内面的解放というおどろくべき時代」と名づけたのはもっともである。ニコライ治世の末期にはほとんどすべてのロシアの思想する社会は隠れたる反体制の状態にあった。西欧主義者もスラヴ主義者も、穏健自由主義者も過激社会主義者も、また多くの保守主義者でさえも、その窮極目的においてこそ異なれ、すべての人々が改革の緊急必要性、何よりもまず農民の解放という一点ではひとつになっていたのである。

農奴解放以後はどうか。農奴解放をはじめ一連の諸改革がおこなわれたにもかかわらず

ず、アレクサンドル二世の治世（1855～81）は革命運動の強化した時代であった。そしてツァーリ自身が1881年の初期に革命家のために暗殺され、革命運動の犠牲となっておれたのである。この矛盾をどう説明すべきか。第一に農奴解放をはじめ一連の諸改革が不十分であったこと、第二に専制政治が温存されたこと、第三に改革が反動を伴ったことがあげられよう。この革命運動は Народничество とよばれた。そしてこの運動の担当者はインテリゲンツィアであった。1870年代における「人民のなかへゆく」の運動、また革命的少数者の組織「人民の意志党」の政治的テロ活動はその代表的なものである。ついで80年代および90年代は政治的反動が、経済的進歩と手をたずさえて進行した時代であった。前者の象徴的指導者がポピエドノスツェフであったとすれば、後者のそれはウィッテであろう。この時期に新しい反体制思想が舞台に登場し、その後のロシアの発展に大きな役割を演ずることになる。それがマルクス主義である。ロシアのマルクス主義は、ロシアの工業化とむすびついて、都市労働者階級の成長とこの階級内の不満の増大とむすびついてあらわれたものである。これらマルクス主義者はやがて社会民主党（S.D.）を結成する。同時に、7・80年代に敗北を喫したナロードニチェストヴォも息を吹きかえした。やがて新しいナロードニキは社会革命党（S.R.）を組織し、農民に注意を集中する。以上の社会民主党、社会革命党という社会主義諸政党とともに、自由主義者の組織も生れる。最後に、少数民族の間にもロシア化政策に対する当然の抗議として反体制グループが成長する。

以上、経済発展、政治思想の成長発展とともに、同じ方向に作用したもうひとつの要素があった。この第三の要素はロシアの新しい国際的地位である。ピョートル大帝以来、つまり18世紀以来、ロシアはヨーロッパ諸大国のひとつとなった。また北アジアにおいて太平洋岸にまでひろがる広大な領土をもったことはロシアを世界国家とした。その帝國的課題を果たすために、ロシア政府としては、もっと行政を完備する必要があったし、またもっと工業を発展させる必要があった。そして行政の完備や工業の発展のためには、一般教育ならびに技術教育の発達が必要であった。当然のことながら国際政治と国内政治との結びつきもまた強くなった。それはこの時代のいくつかの戦争、19世紀初めのナポレオン戦争、1850年代のクリミア戦争、20世紀初頭の日露戦争、最後に1914—18年の第一次世界大戦、これらの戦争がロシアの国内発展に果たした役割を想起すれば十分であろう。ちなみに、ナポレオン戦争とデカブリスト反乱、クリミア戦争と農奴解放、日露戦争と1905年の革命、第一次世界大戦と1917年のロシア革命、という諸事件が思いおこされるのであって、以上にあげたデカブリスト反乱、農奴解放、1905年の革命、1917年の革命、これらはいずれも古い秩序に対する新しい原理の闘争の表現であったのである。

以上のように19世紀ロシアは決して不動でも停滞でもなかった。動きすぎるくらいうごくダイナミズムがあった。このダイナミズムをどのように概念化したらいいかといえ

ば、今日一般に「近代化」という言葉で了解されている社会変革の様式で考えるのがいいと思う。とくに1861年の農奴解放はロシアの近代化の重要な起点となる。ロシアの近代化には二つの段階があったように思われる。第一は守勢的で表面的な段階、第二は積極的でより徹底的な段階である。前者は17世紀中葉が起点となるであろうし、後者はいうまでもなく1861年が起点となるであろう。もちろん、1861年の農奴解放も積極的な近代化をはじめる意図でおこなわれたのではなく、支配体制の側ではむしろ守勢的な意図がつよかったと思われるのだが、結果的には、表面的でなくより徹底した近代化の起点となったのである。

ところで、近代化論には従来二つの考え方があるようにみえる。第一は、近代化＝西欧化という考え方である。アメリカのロシア史学界では故M.カルポヴィッチ教授をはじめとして、その教えを受けた多くの学者がそのような考え方をとっているように思われる。第二は、近代化＝工業化という考え方である。この考え方はアメリカ学界では少数派であるがC. E. ブラック教授などがその代表者であろう。前者の考え方に立つ人々は、19世紀ロシアは西欧流の政治的民主化の道をたどりつつあったとみるのであって革命前のロシアはその直面したあらゆる問題を漸進的かつ平和的發展の道をとおして解決する機会があったと考えているのである。したがってロシア革命はその西欧化路線から脱線したものであって、いわばその断絶とみているといていいのではないか。これに対して後者の立場に立つ人々は、革命前のロシアは生活の様式が農業から工業のそれへ変化しつつあったのであって、そのプロセスはロシア革命によって若干阻害されたとはいえ、本質的には連続しているものであって、スターリンの五ヶ年計画はそのことを物語っていると考えるのである。このように両者の立場は異なるのであるが、しかし、ロシア革命の評価においてはそう大きな相違はないように思われる。前者は西欧化路線の断絶とみるのであるから、ロシア革命を否定的に評価しているといえよう。また、後者は工業化路線が連続しているとみるのであるから、ロシア革命をとくに積極的に評価しないといえよう。周知のように、マルクス・レーニン主義に立つものはそうではなくロシア革命を積極的に評価する。何故ならばマルクス・レーニン主義者は歴史は共産主義に向かって動きつつあると確信しているからである。その点、歴史は政治的民主主義へ向かって動きつつあると考えている近代化＝西欧化説とはとくにするどく対立するのである。

ところで、いわゆる近代化論に対して我国のロシア史研究の少壮学徒のほとんどは否定的批判を加えている。その多くはマルクス・レーニン主義の立場に立っての批判であると思われる。ただ、ここで一言注意しておきたいことは、近代化論否定の重要なひとつの根拠と思われるものが政治姿勢の問題にあるということだ。すなわち、近代化論者はロシア革命に敵対し、その再発を防止せんとする立場のものだというのである。そのような政治姿勢が革命前のロシア社会の近代化を云々するというのである。しかし、私をしていわしむれば、問題は政治姿勢の如何でなく、歴史事実の正否である。事実の認

識における正否の判断が根本であって、それにとって代って「進歩的」な政治姿勢だの「反動的」な政治姿勢だのという価値判断が強調されることは、真理認識の上で危険だと思う。近代化論に対する批判は事実認識の問題にしぼる必要がある。近代化論もひとつの仮説にすぎないのであって、近代化論者もこれを絶対不謬の真理と考えているのではないのである。

そこで、事実認識の問題にしぼって考えてみると、近代化論者のいうところには一面の真理があるのであって、それを全面的に否定し去るわけにはいかないと思うのである。ただ、私が問題としたいのは、近代化論者の場合、19世紀のロシアを主として「改革史」としてとらえているのではないかということである。「改革史」としてとらえているからこそ、故カルポヴィッチ教授の云っているように、革命前のロシアはその当面したあらゆる問題を漸進的平和的に解決する道があったのだ、という解釈が生まれてくるのであろう。また、ブラック教授の場合も同様であって、たとえば、近代化の指導者として革命的インテリゲンツィアよりも革新的官僚を重視する解釈が生まれてくるのであろう。たしかにブラック教授のいうように帝政ロシアの近代化に果たした官僚の役割をみくびってはいけないと思う。これからその方面について大いに研究される必要があると思う（Theodore von Lane はウィットについて、また、Marc Raef はスペランスキーについて研究を発表している）。しかし私は19世紀ロシア史を一面「改革史」としてとらえることが出来ると同時に、他面「革命史」としてとらえることも出来ると考えている。何故なら19世紀のロシアにおいて革命という契機が改革に作用していることが考えられるからである。たとえば、農奴解放がそうである。アレクサンドル二世が解放前夜の演説において「下からよりも上から」と述べたのはまさにその端的な表現であろう。潜在的な革命の危機は改革に作用する。農奴解放前夜のいわゆる革命情勢が農奴解放という大きな改革を生みだしたと考えられるのである（そのことは19世紀初期の改革運動についてもいえるのではないか）。潜在的な革命の危機が改革に作用するのに対して、顕在化した革命の危機は政治反動に作用する。農奴解放後の6・70年代の革命運動は、8・90年代の政治反動を招来したのである。しかしその政治反動がまた革命の勃発に作用する。1905年の革命がそれである。1905年の革命から1917年の革命に至る過程もまた同様である。19世紀のロシア史あるいは革命前のロシア史を他面革命史としてとらえた場合、革命の推進主体として官僚と区別されたインテリゲンツィアの重要性が注目されねばならない。ブラック教授のように、ロシアの近代化に大きな役割を果たしたものとして官僚をとくに重視するのは一面的な見方だというそしりを免かれまい。

実は19世紀のロシアは近代化しつつある後進国の一原型と考えられる。そしてその近代化には改革と革命という二つの契機が同時に存在していた。改革の契機と革命の契機との同時的存在こそ、19世紀ロシア史のダイナミズムの基本的内容ではあるまいか。